

月の花挽歌 ～15. 最終章 突然炎のごとく 真紀と麻里子～

15-14

「そんな顔をしないでください。私だって人情の機微に触れれば……ですよ」と朝倉は思わせぶりな態度で言った。

「ありがとうございます。ご迷惑をおかけしますが、よろしく願いいたします」と真紀は疲労感を滲ませながら言った。

「すでにニュース・リリースは配信してしまっているので、世間に知られることは承知しておいてください。横田には事の次第を私から話しておきます。今後、裸婦像に関する一切の取り扱いは私に委譲してください。契約書を作りますが、それでよろしいですね？」と朝倉は小鼻を膨らませて言った。

たった今の辰巳の問いかけに、真紀は裸婦像の認知度の高さを改めて実感した。

「2点とも品川区の天王洲アイルにある『美術品保管倉庫』に保管してあったのを、日曜祭日は出庫できないのですが、知り合いの画商に無理を言ってもらい、今日、銀座4丁目の画廊に運んであります。よろしければこれからご案内いたします」と真紀は腕時計を見ながら言った。

「休日のこんな時間にいいのかい？……そうかぁ、なるほどね！あなたの好手に、まんまとやられたってわけだ。こうなったら、裸婦像を見ないことには収まりがつかない」と辰巳は目を輝かせて言った。

ホテルオークラからタクシーで10分もかからないうちにお目当ての画廊に着いた。

「お待ちしておりました」と朝倉は午後10時を少し回っていたが、待ちくたびれた素振りも見せないで丁寧な挨拶をした。

真紀が二人を紹介し終わると、朝倉は24㎡の床面積と3mの天井高のギャラリーの正面奥に97cm×190cmの裸婦像が2点並べて展示されている前に辰巳を案内した。

『着衣のママ』と『裸のママ』を交互に見比べていた辰巳は、しばらくして隣にいる真紀の息づかいを感じて我に返った。

真紀は何も言わず、その光景を予測していたかのような横顔を辰巳に見せていた。

辰巳は眼前の裸婦像にまつわる風聞を知っていたので、先ほど真紀に購入依頼をされた時は、『H美術館』の尊厳を傷つけられたような気がして、内心では身の程知らずで小賢しい女だと思いつつも、好奇心のほうが勝ってしまった。

こうして実際に2点の裸婦像を眺めていると、ベッドに横たわるモデルが互いに響き合い息づいて、辰巳は無意識のうちに永遠の女体美の神秘的な競演に誘引されていった。